はじめに

中世の人々はどのような場所に暮らしていたのであろうか。京都・鎌倉といった都市を除けば，だれしも漠然と「村」や「町屋」に住んでいたにちがいないと思うはずだ。では，その実態はどうだったのかと問われると，答えに窮する歴史学研究者が多いのではないだろうか。

本書は，この難問に考古学の方法論で挑んだ試みである。分析対象は，中世後期の「百姓層」が住んでいたであろう「村」であり，集落遺跡である。都市部の町屋(宿・市等)，領主層の拠点である城館遺跡と百姓層主体の集落遺跡との関わりはほとんど論及できていない。いずれも今後の課題である。

周知のとおり，中世集落の考古学的研究は，畿内を中心に進められてきた。それ以外の地域の研究も，もちろんあるわけだが，畿内や西日本の研究者が中世集落の研究をリードしている状況をみていると，関東の中世集落を明らかにすることで，畿内や西日本と似た経緯をたどったのか，それとも異なる変遷を遂げたのかがわかるかもしれない。さらには関東の中世集落の特徴を見出せるのではなかろうかとの展望のもと，本書では，関東地方にフィールドを絞っている。関東の集落遺跡を足掛かりとして，今後は，他地域との比較を進め，ゆくゆくは列島規模で中世集落像を明らかにしていきたいと考えているが，本書はそのための第一歩である。

集落遺跡は，なにも中世に限るものではないし，縄文・弥生時代にも確認できる通時代的な遺跡である。平安末期・鎌倉期にも集落遺跡は認められるにしても，本書であえて中世後期という限られた時代を設定しているのは，フィールドを関東に絞った場合，中世全般を通して集落の推移が追える遺跡が乏しいことと，調査された集落遺跡が中世後期の事例にかたよる傾向にあったことが一因である。さらに集落遺跡の発掘調査では，集落全体がまるまる発掘された事例はほとんどなく，部分的な調査から集落像を明らかにしなければならないが，中世前期の集落遺跡の調査例は極めて乏しいのである。当然，中世前期と

中世後期では集落遺跡の様相は異なると予測されるものの，まずは，調査例の多い中世後期の集落を明らかにした上で，将来的に中世前期に遡って比較検討できればと思う。

課題は山積しているが，近頃の考古学では，中世集落の研究は停滞気味である。末期症状にあえいでいるといってもよいだろう。以前に比べると調査事例が少なく，既存の調査では集落の様相を明らかにしづらくなっていることが影響しているのかもしれないが，発掘調査された集落遺跡は様々な情報をもっているのである。それらを活かすことで，すでに研究されている遺跡であろうとも，新たな視点で集落の姿を明らかにすることはできるだろう。また，建物等の遺構が明確でなく，これまで分析の対象とされてこなかった遺跡も多々ある。そのような遺跡であっても，何らかの情報を引き出すことは可能である。

その試みとして本書では，中世集落の解明にいささかなりとも寄与できればと考え，遺跡・遺構を軸とした中世後期における関東地方の集落論を展開していきたい。他地域との比較や時代ごとの変遷は，この先学問分野の垣根をこえた多くの研究者たちとの共同作業によって解明できればと思う。